

第8章

早岐の歴史と文化財



早岐の位置

この地域の小中学校

小学校：早岐小学校、花高小学校

中学校：早岐中学校

第8章 早岐の歴史と文化財

交通の要地

「早岐」という地名は、奈良時代に国が作った『肥前國風土記』に「速来」として現れます。これは、佐世保地方で最も古い地名で、早岐瀬戸を出入りする潮が、満ち干きによって速い流れになることに由来する地名と考えられています。



早岐瀬戸



早岐の地図

- ① 上原遺跡
 - ② 三島山古墳・経塚
 - ③ 大念寺(大念寺遺跡)
 - ④ 早岐神社(早岐城跡)
 - ⑤ 浄漸寺
 - ⑥ 早岐押役所跡
 - ⑦ 早岐旧市街
 - ⑧ 観潮橋(潮の目)
 - ⑨ 千人塚
 - ⑩ 早岐駅
 - ⑪ 勝磯の碑
 - ⑫ 広田城跡
- 平戸往還

早岐は、有田・伊万里など内陸からの道と、北松浦と東彼杵を結ぶ海岸沿いの道の交差点に位置しています。また、海に面していることから港も置かれ、古くから交通の要衝としてたくさんの人や物が集まる場所でした。そのため、自然と「市」が開かれるようになりました。



早岐茶市

現在も毎年5月に「早岐茶市」が開かれ、たくさんの人で賑わいます。今では現金取引となりましたが、ももとは物々交換でした。その姿は、鎌倉時代や室町時代の中世の「市」の姿を伝えるものでもあります。

「速来」という地名と「早岐茶市」の存在。それは、古代から土地が開かれ、多くの人が集まり、文化の高い地域であったことを物語っているのです。

コラム～早岐茶市こぼれ話～

昔の焼き物は窯で焼くときに、特に皿は10数枚を重ねて焼いていた。このとき温度が上がりすぎると皿同士がくっついてしまっ使い物にならなくなる。

それを茶市に持ち込み、焼き物を詳しく知らない人たちに、「湯につけると一枚ずつ離れる」と言って売ったこともあったそうだ。

旧石器時代の早岐

今から約13,000年より前の旧石器時代は氷河期と呼ばれ、現在よりも平均気温が5度ほど低い寒い時代で、海面が現在より約90メートルも低くなっていました。当然、早岐瀬戸はなく、小森川は大村湾か佐世保湾のどちらかに流れていたのです。

そのため、当時の人が住んだ場所、つまり遺跡は、今では海底や川による沖積地の下になっている場合が多いのですが、上原町にある上原遺跡は、数少ない陸上にある遺跡です。

遺跡は西九州自動車道の建設工事で発見されました。約20,000年前の黒曜石で作ったナイフ形石器などが出土していますが、今は道路で削られてありません。

この当時は、²ナウマンゾウや³オオツノジカなどの大型動物がいて、人々はそれを獲物にしていたのです。早岐地方にもゾウが歩いていたのです。



上原遺跡を通る西九州道

- 1 川によって流された土砂が河口付近に積もって出来た平地のこと。
- 2 明治時代に、このゾウの化石を調査したドイツ地質学者のナウマンの名をとって命名された。氷河期の日本にいたが、現在では絶滅している。
- 3 角の広がりは2.5メートル、肩までの高さが2メートルもある大きなシカ。ナウマンゾウと同じく氷河期の日本にいたが、現在では絶滅している。

縄文時代からの遺跡

上原遺跡のほかに、権常寺、二本松、下ノ原などには縄文時代の遺跡がありますが、遺物の量も少なく、あまり大きな遺跡ではなさそうです。小森川の下流一帯には低地が広がっているので、狩猟を行う縄文時代より、稲作などを行う弥生時代からの生活に適しているようです。

早岐2丁目の大念寺の境内には、弥生時代前期(約2,300年前)の大念寺遺跡があります。遺跡の全貌はわかっていませんが、当時のムラがあったようです。

大念寺遺跡からは、古墳時代の遺物も見つかっています。人々が定着し、他の地域と交流も行われたでしょうから、交通の要地として発展する早岐の原点となる遺跡かもしれません。



大念寺

※山門は市指定文化財



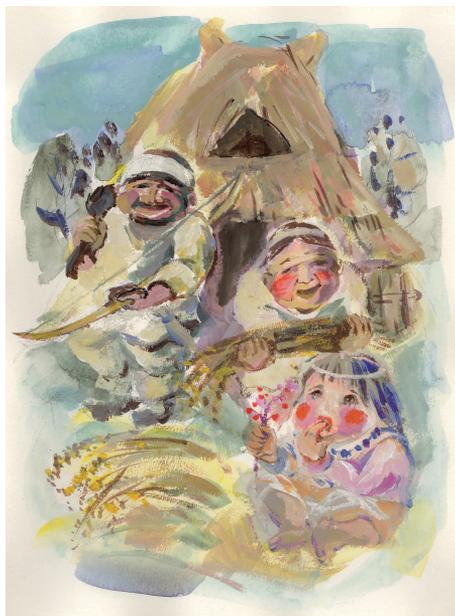
三島遺望

この島に葬られた人は、大念寺遺跡とは無縁ではないでしょう。島であるため、人々の生活の場所から離れ、特別な霊場のような世界だったのでしょ。

肥前國風土記と早岐

古墳時代の終わり頃から、日本は国としての形が整いはじめ、やがて天皇を中心として律令などの法律によって国が統治される時代となります。そして、奈良時代(8世紀)に国は、全国の風土や文化、伝承などを記録する『風土記』を作りました。そのうちの『肥前國風土記』は、現在の佐賀県と長崎県を記録したものです。

- 1 律とは刑法。令とは民法。中国(唐)の法律をまねて作られた。
- 2 713年(和銅6)に全ての国に編纂が命じられた。現存するものは常陸・出雲・播磨・豊後・肥前の5つの風土記。



土蜘蛛と速来津姫

イラスト:天石 博

その中に早岐のことが書かれています。「風土記が作られる400年ほど前のこと、速来村の土蜘蛛が天皇の命令に従わず、反乱を起こしたので、天皇は家臣の神代直を派遣して反乱を鎮めた。反乱を起こした土蜘蛛の長は速来津姫であった。そして、姫の弟が持っていた石上神木蓮玉と白玉など美しい三つの玉を持ち帰った。その玉から具足玉国(そないだまのくに)と呼ぶようになった。」というものです。

玉のうち、白玉は真珠とも考えられています。そして、その具足玉(そないだま)国が変化して彼杵(そのぎ)の地名になったと考えられています。

この肥前國風土記の記述は、天皇が地方を国家に組み入れていく様子を示しているのです。

6 東北の蝦夷、九州の熊襲のように、当時の早岐や五島などにいた豪族の総称。

平安時代の早岐

肥前國風土記が作られてから約400年後の平安時代の終わり頃、古墳のある三島に、今度は経塚が造られました。(第9章広田参照)

平安時代の終わり頃には、戦争や飢饉が相次いで世の中が乱れ、仏教が滅ぶという思想(末法思想)が広まります。そこで、仏教が復活する時に備えてお経を地下に保存するというのを始めました。そのお経を埋めた塚が「経塚」なのです。

経塚には、大変貴重な中国から輸入された鏡や焼き物が納められており、相当な有力者が早岐にいたことを物語っています。やはり、古代から人や物が多く集まり、高い文化をもつ土地だったからこそ、このような経塚が造られたのです。



三島山経塚出土品(市指定文化財)

佐世保市博物館島瀬美術センター所蔵

初めての人の名

鎌倉時代の早岐は、京都の東福寺というお寺が持つ莊園の一部でしたが、この頃になると、各地に武士が現れて莊園を自分の土地にしていきます。最初は松浦党の一派である山代氏の領地になり、地名をとって早岐氏を名乗ります。そして、当時の文書には、1285年(弘安8)に早岐又三郎清、1299年(永仁7)に早岐藏人広能(第13章宮参照)、1330年(元徳2)には早岐五郎藏人入道という武士が記録されています。

7 貴族や寺、神社がもつ田畑のこと。地方の豪族は、税を逃れるために、自分が切り開いた田畑を貴族や寺、神社に寄付し、その管理人となった。

8 平安時代の終わり頃から、長崎県北部から佐賀県唐津地方にいた武士団の総称。

コラム～早岐城のこと～

早岐小学校の西側、早岐神社のある丘は早岐城跡といわれている。しかし、神社を建てたときに地形を削って、わずかに神社裏手の斜面に「段築」と呼ばれる階段状の遺構が城の名残と考えられている。

早岐の支配者は、最初は早岐氏、そして戦国時代になると大村氏、後藤氏、そして平戸松浦氏と目まぐるしく替わっていることから、誰が城を築いたのかは分かっていない。

地形的にこの場所は城を構えるのに最適で、早岐全体の低地を見渡せ、また早岐瀬戸を通る船も監視することができる。



伝・早岐城跡(早岐神社)

土地の持ち主が替わる

戦国時代になると、早岐地方は土地の支配者が度々替わります。それは、早岐や三川内・江上・日宇が、南は大村氏、北は平戸松浦氏、東は武雄の後藤氏と、戦国大名に囲まれていたからです。

大村氏は、1545年(天文14)に自国の北の境を、佐世保山中堂(桜木町山中観音堂)までとしています。その後、後藤氏の領地になり、さらに1563年(永禄6)の相浦飯盛城の戦い後、今度は平戸松浦氏の土地になっています。(第4章相浦谷参照)

そして、1586年(天正14)には、大村氏が以前の自分の土地を取り戻そうとして、平戸領の最前線に置かれた井手平城や広田城を攻めたのですが、成功しませんでした。(第9章広田、第11章三川内参照)

コラム～千人塚の伝説～

権常寺の観音堂の裏に直径が8メートルほどの盛土がある。この盛土は「千人塚」と呼ばれ、地元の人たちは塚のある谷を「地獄谷」と呼んでいる。

1586年(天正14)の広田城の戦いのあと、退却する大村方の軍勢の一部が平戸方の追撃を受け、この谷で全滅した。

土地の人々がこれを哀れに思い戦死者を葬ったが、千人に一人足りなかったので、通りがかった白い犬を斬り殺してこれに加え、千人塚としたという伝説がある。



千人塚

しかし、実際にはこの地での合戦の記録はなく、墓であることは疑わしい。むしろ、早岐の平戸往還の9一里塚(ホテルファーストイン早岐前)からほぼ一里(4キロメートル)の距離にあって、そばに伊万里街道が通っていることから、一里塚の可能性も高い。もしくは、信仰による塚、あるいはもっと古い古墳時代の古墳かもしれない。

9 往還や街道に1里(約4キロメートル)ごとにおかれた道しるべ。

早岐の繁栄

江戸時代になり平和な時代が訪れると、街道の交差点にあって、港もある早岐は、平戸藩の商業の中心地として、藩内でも指折りの町に発展しました。家々が密集する今の早岐の町並みは、江戸時代の中頃には出来上がっていたのでしょうか。

その中心に平戸往還(街道)が通っています。町を南北に貫き、道の表面の一部は石畳で舗装されていました。



平戸往還の石畳

石畳の道は、今ではほとんどがアスファルト舗装の道路に変わってしまいましたが、一部は早岐2丁目の早岐交差点から西蓮寺までの間に江戸時代の面影を残しています。平戸往還はそのほとんどが狭い石ころだらけの山道であるのに、この早岐だけが石畳で舗装していたということからも、当時の早岐がいかに豊かだったかがわかります。

平戸往還は早岐の町の真ん中を通っていますが、数カ所で直角に曲がっています。このような道は「鉤型通路」と呼ばれ、城下町によく見られるものです。戦になったときに見通しが出来ないようにとの配慮だそうですが、早岐の鉤型通路が戦に備えて造られたのかどうかは、分かりません。



早岐旧市街地図(赤い線が平戸往還)

早岐は、平戸往還の宿場でもありました。一般の人たちが宿泊する旅籠(旅館)のほか、平戸藩主が泊まる本陣、重臣たちのための脇本陣もありました。早岐1丁目の村上病院が本陣、その隣が脇本陣でした。

また、江戸時代末期には、早岐瀬戸の観潮橋付近が平戸八景の一つ「潮の目」として紹介されています。ここは、早岐瀬戸の中でも特に狭くなっていて、潮の干満時には、かなりの早さの潮流を見ることができます。



早岐本陣跡



平戸八景に描かれた「潮の目」

その「潮の目」として紹介されている観潮橋付近には、潮の流れをコントロールするための堤防が築かれています。そのため、潮の流れはさらに急となりますが、潮の通り道の手前は流れがなくなって、船が安全に停泊できる港となっています。

これは、早岐瀬戸沿いを出来るだけ広く利用するための、昔の人々の知恵といえるでしょう。

- 10 平戸往還沿いの8カ所の名勝・奇勝(優れた景色、普通ではない変わった景色)。佐世保の「眼鏡岩」、「巖屋宮」、「羅漢窟」、「潮の目」、江迎の「瀧龍の瀧」、「高岩」、吉井の「御橋観音の天然石橋」、小佐々の「大悲観」の総称。

早岐の港からは、瀬戸内や関西方面へも船が出ており、三川内焼などを運んでいました。ハウステンボス町にあった大手原塩田(第9章広田参照)で作られた塩も早岐に運ばれていました。

また、江戸時代の初めに砥石として早岐に陸揚げされた天草(熊本県)の白い石は、今村弥次兵衛(第11章三川内参照)によって陶石として発見されたと伝わっていますので、天草からも荷が入っていたことが分かります。



早岐の港

コラム～三川内焼と早岐～

江戸時代の初めより三川内皿山(三川内・江永・木原)から早岐に焼き物が持ち込まれ、早岐の港から主に西日本に積みだされた。最大の消費地は大坂であった。江戸の町遺跡からも瀬戸や美濃の焼き物のほかに三川内焼も出土しているが、量は少ないところを見ると、三川内焼は関西の経済圏に入っていたようだ。

また、磁器の原料になる陶石も天草から早岐に陸揚げされていたことを考えると、三川内焼の繁栄は、早岐の町あってこそのものだったといえる。

早岐の大火

1758年(宝暦8)に、早岐は家屋194戸を焼き尽くす大火(大火事)に見舞われました。どれほどの範囲が燃えたのかは詳しく分かっていませんが、早岐2丁目の西蓮寺はこのとき全焼しています。

都会が大火になっている例では、大阪府の堺市が特に知られています。発掘すると、織田信長が焼き払った焼土層、その後の¹¹大坂夏の陣のときの焼け土が層になって重なっているため、時代を決める手がかりになっています。早岐の地下にも同じような焼土層があることを、2014年(平成26年)の発掘調査で確認しました。

11 1615年(元和元)に起こった徳川幕府と豊臣家との戦い。この戦いで豊臣家は滅亡した。

早岐押役所

江戸時代の佐世保地方には、平戸藩序の出先役所として幾つかの役所が置かれていました。相浦谷から佐世保を担当したのは相神浦筋郡代役所(第1章佐世保市街参照)、日宇から早岐を含む佐世保の南半分を担当したのは、早岐押役所です。また、三川内の焼き物関係を管理したのは三川内皿山代官所でした。



早岐押役所跡

早岐押役所は早岐2丁目の大念寺の裏手にあって、建物は建て変わっていますが、屋敷まわりの石垣などは当時のままに残っています。今でも、押役所役人の子孫の方が住んでおられます。

郷土の人～近代銀行の創始者・牧山有格～

1839年(天保10推定)～1907(明治40)

牧山家は代々、早岐押役所(平戸藩の地方役所)の押役を勤めていた。有格の青年時代は詳しく判っていないが、写真は東京で撮影されている。1883年(明治16)、43歳のときに早岐の殖産工業のために融資を行う早岐起業会社を設立した。この会社はその後、株式会社早岐銀行に発展し、さらに親和銀行と合併した。

有格は、佐世保地方の銀行の草創期に功績を残した人である。



牧山有格

※写真提供：牧山有克氏

てつどう かいつう 鉄道の開通

日本最初の鉄道は1872年(明治5)に東京新橋と横浜間に開通しました。そして、鉄道網は全国に急速に広まっていきました。

早岐駅は1897年(明治30)に開業しています。最初の鉄道開通から25年をかけて、日本の西端に達しました。そして1898年(明治31)には佐世保駅まで通じています。鉄道は、佐世保軍港への物資と人員の輸送が重要な目的でした。



きゅうはい せきまきえきしよ
旧早岐駅駅舎



きゅうまいしよやてんじやう そうしよく
旧駅舎天井の装飾

現在の早岐駅駅舎は、1897年(明治30)に開業した当時の建物です。天井や明かり採り窓などに洋風のデザインを取り入れており、明治時代の駅舎建築としては、長崎県内においても貴重な建物でした。2014年(平成26年)に老朽化のため駅舎は建て替えられています。また、早岐駅は蒸気機関車が廃止されるまでは、蒸気機関車の基地(早岐機関区)が置かれていました。

現在駅の構内に残されているレンガ造りの¹²給水塔は、蒸気機関車の運転に必要な水を補給するために造られたもので、蒸気機関車時代を物語る数少ない施設です。また、線路上には鉄道開通当時に建設された鉄橋なども多く残されています。このような施設は、日本の近代化を象徴するもので、「近代化遺産」と呼ばれています。



きゅうすいとう
給水塔



うわばるきやうりやう
上原橋梁

(レンガ造の橋台が開通当時の物)

¹² 現在残っている部分は給水塔の台座である。かつてはこの上に鋼製の水タンクが乗せられており、高低差を利用して速やかに水を補給することが出来た。

時 代	出 来 事
旧石器時代	約20,000年前 上原遺跡周辺で狩りが行われる。
弥生時代	約2,300年前 大念寺付近にムラができる。
古墳時代	約1,500年前 三島山古墳が造営される。
平安時代	速来(早岐)に土蜘蛛という豪族がいて、そのオサは速来津姫という。
鎌倉時代	三島山経塚が営まれる。
1285年(弘安8)	早岐の松浦党として早岐又三郎清の名が現れる。
戦国時代	
1564年(永禄7)	早岐、指方、日宇は武雄の後藤家から平戸松浦家に譲られる。
1586年(天正14)	大村方が広田城を攻めるが、平戸の援軍で撃退される。
江戸時代	
1758年(宝暦8)	早岐が大火事に見舞われ、194戸を焼く。
近代	
1882年(明治15)	牧山有格らが早岐起業会社を設立する。
1885年(明治18)	第12高等小学校が早岐に開校される。
1897年(明治30)	早岐駅が開業する。佐世保駅までの開通は翌明治31年。
1904年(明治37)	木越旅団が勝磯から出陣。日露戦争が起る。
1942年(昭和17)	早岐が佐世保市に編入される。
現代	
1972年(昭和47)	早岐機関区から蒸気機関車が姿を消す。